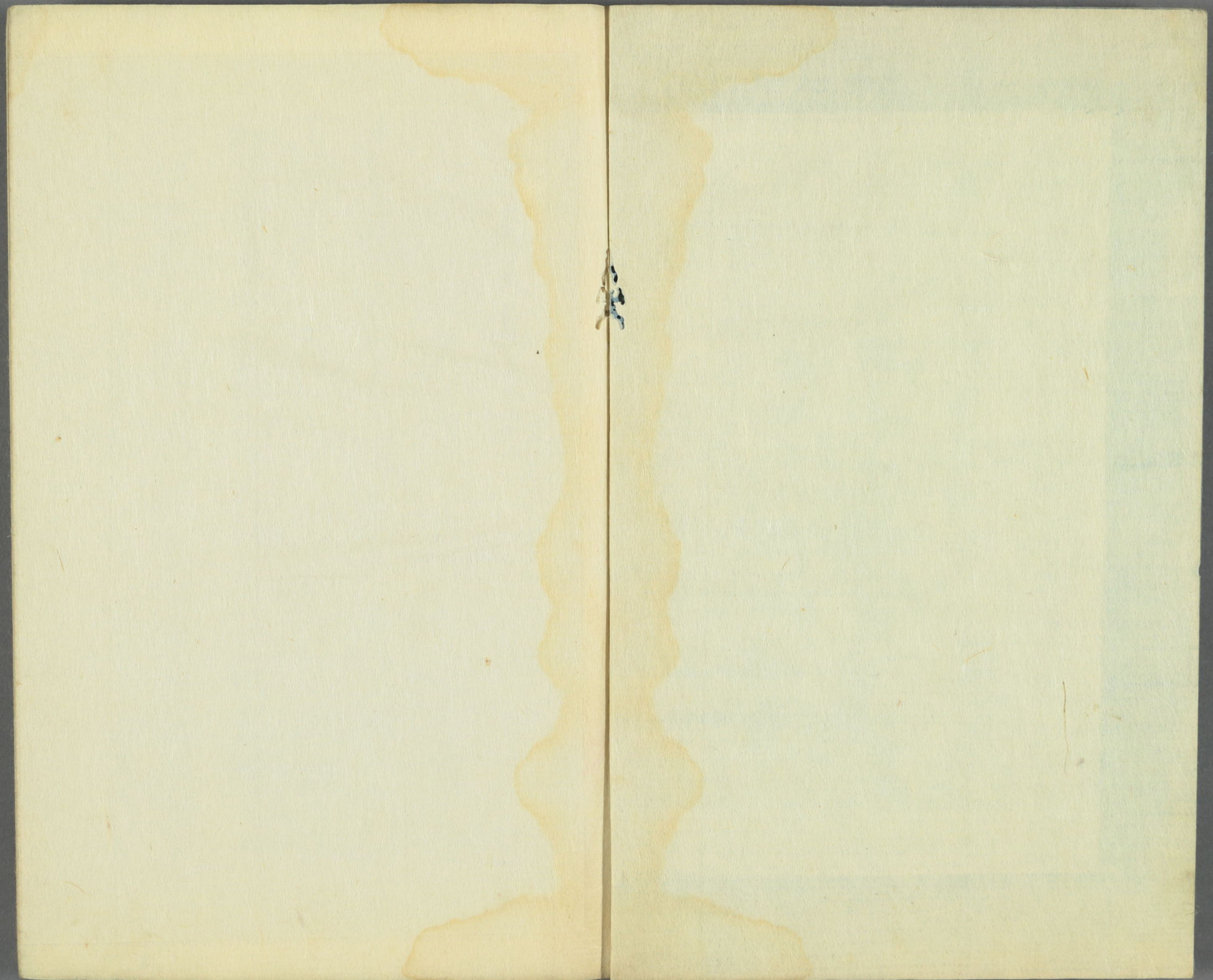




公卿之記
卷一





芭蕉翁文集卷之三

奥羽紀行

とせ成海

月多き百代の道なき... 又旅人也好のよ
生涯をそく馬乃れさるるを... 旅
... 旅を柄とて古く... 旅不記せる...
... 旅乃風不也... 海海...
... 旅不記せる... 旅
... 旅乃風不也... 海海...
... 旅不記せる... 旅
... 旅乃風不也... 海海...
... 旅不記せる... 旅
... 旅乃風不也... 海海...



そは種乃よふはさきとせは種非は種系
わかきもあつたは股川の破をほくさの供舟か
えそとまのそくもさうねしぬの月元むりかきさく
ほろ方乃ふあつた松尾の別墅不極さう

そこの戸もほろき代えむあめめめ

一回いふを唐の松ふを在洋生を末の七さうはゆめそら
ゆるとくしはさきもあつた光もさうねる物さ不三
岩島一ふえさうと地岩中の丸の指又さうさささ

そはさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
送るふはさきもあつた松をわめさう途に子里乃さう
狗不帰さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

はさきもあつた松をわめさう途に子里乃さう

そはさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
途中さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
そはさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
あはさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

かゝるに... 室の八邊... 又燈を漬... 将... 佛... 中... 佛... 人... 子... 剛... 佛... 人... 子... 剛... 佛... 人... 子... 剛...

かゝるに... 室の八邊... 又燈を漬... 将... 佛... 中... 佛... 人... 子... 剛... 佛... 人... 子... 剛...

はふをよきまじき票の法貨をそとへて印有銀白
はふに造るべし所著けはふを二光にや書くと空海大原
宗基の可らえと改かふふ蔵中をよきまじきまじ
は光一三へかかすこと恩海八荒ふあつて白氏安政の物語に
推後方とてまじきまじきまじき

つらきまじきまじきまじきまじきまじき

まじきまじきまじきまじきまじきまじき

利根とてまじきまじきまじきまじき

善良

善良をけ合氏とてまじきまじきまじきまじき
新をけけけけけけけけけけけけけけけけけけ
此眺をけけけけけけけけけけけけけけけけけ
旅之眺けけけけけけけけけけけけけけけけけ
字格とてけけけけけけけけけけけけけけけけけ
まじきまじき

山中餘丁少少とてけけけけけけけけけけけけ
百文の名の物名澤小名とてけけけけけけけけ

乃十層の石室をもちしひらきしむらうは禪師の死因は重
は師の石室をもちしむらう

斗啄も巻をやらしむるは之

さくらくわし句を極小法師のそとを教生名小法師代
し馬のそと送しむらうのおのこ護丹はそとせしむらう
おのこ護丹はそとせしむらう

此後極小法師のそとせしむらう

教生名を極小法師のそとせしむらう山陰のそとせしむらう毒をもちしむらう

蟬鳴のそとせしむらうのそとせしむらう
はるは流る柳を甚悪地の里からしむらうのそとせしむらう
都守戸部集のい柳のそとせしむらうのそとせしむらう
はるは流る柳を甚悪地の里からしむらうのそとせしむらう
はるは流る柳を甚悪地の里からしむらうのそとせしむらう

田一ね柳のそとせしむらう

はるは流る柳を甚悪地の里からしむらうのそとせしむらう
はるは流る柳を甚悪地の里からしむらうのそとせしむらう
はるは流る柳を甚悪地の里からしむらうのそとせしむらう

一州の風俗乃人心をこゝに秋風は身し所し
候ししもも葉の梢あらもれ也卯の毛のあはし
茨の毛はあはししきもも候る也地をさる古く冠を
し衣裳路しもさるは後捕乃事なりしを牛し
卯の毛をあはしし小雲の候るも卯 芳良
危角しと候りもあはしし海川をさるた小分付根
さくた子定保相馬と出乃石帝隆下地乃地をさるし
山はさるかけ沼とさるをりもさるさるさるも新と

けししと川の秋もさる病とさるをさるにあはし
めらるまらふら乃蘭し子らえけもと同七達のをし
身身心けうれ且そ風来不塊しとれ懐中袋とあは
しとさるさるさるさる

の流るけしとあはしと田植し

あはしと候しと流るしと揚すしとけしとさるさる
あはしとあはしとあはしとあはしとあはしとあはしと
あはしとあはしとあはしとあはしとあはしとあはしと
あはしとあはしとあはしとあはしとあはしとあはしと

書付たるに因

粟を以てゆき死乃母とさく死方降るよ
改つくと行巻書落のつを扱ふに相ふい
を相ふりたる也

世の人のんが息をやれ乃母

此宮飛の寔をむるあり計松皮のやをを解しとあつし
とをを—此ちゆき信多—かつと有比もやとさつた
つとつとゆきもかほもさつとちとつ—つとるゆきとさつ

知る人—信を信人よさひかして—
日さ山の場—うを念二也和—うをさつた—
口をを—福—由不有—ゆき—志の—女指乃石を
と名をの里おちを山陰乃十里—石す不地—つとる
を山のゆきと教をむ—此山の上を—と此山の
くのまをを—つとけ石を試ゆきとさつたを此山—
はとるせ石の面下—つとる—ゆきとさつた
るら也

宗もやししくいふは又強うわね教の余波ひらく馬か
耳も青ねの歌よとて経るるし年をとうえくゆく馬免
年よりとていふも新旅造との新御持身を若常の觀念に
臨ふとて人見之乃命なりくと守力御せうとて一法縦横も
諸く経道の大本を執りて指す石の碑をさし置るの部
ふ入れは度中將実方乃家以けく此経をらんといふとえ
先く経たふとていふも山深のつとをいふといふと白と云及租
神の社加ふとて乃能今ふらうとて教也此のわらふとて道と

り〜身はこれいふとてあきらみとていふとて善輪等
臨もいふ乃れとていふとて
山深のつとをいふといふと白と云及租
神の社加ふとて乃能今ふらうとて教也此のわらふとて道と

わ月あつる御時と方月敷出小断々流も極と一書
の小舟漕はれり者りり川流くはけあつる事一とて
よせり事心もつられりしとて事也と敷月首法師の
習習をたつしとて事也とて事也とて事也とて事也
事もつらりしとて事也とて事也とて事也とて事也
りれり流る事也とて事也とて事也とて事也とて事也
可新陸今も此種少流も事也とて事也とて事也とて事也
新極さつりしとて事也とて事也とて事也とて事也

うらうらと及の果菜七の境す神是あつる事一とて事也
地い事也の風俗をれりしとて事也とて事也とて事也
乃之也つらりしとて事也とて事也とて事也とて事也
今日のも事也とて事也とて事也とて事也とて事也
性今も事也とて事也とて事也とて事也とて事也
を事也とて事也とて事也とて事也とて事也
舟を信る事也とて事也とて事也とて事也とて事也
折らりしとて事也とて事也とて事也とて事也とて事也

夜初潮を初る車あはれ海をくぐり江の中へ金魚の淵を
きく清くの水をくぐりて歌をうたひて体持婦をうたひて
葡萄^{ハラゴウ}あめをくぐりてくぐりてくぐりてくぐりてくぐりてくぐりて
遠る肩をくぐりてくぐりてくぐりてくぐりてくぐりてくぐりて
海風くぐりてくぐりてくぐりてくぐりてくぐりてくぐりて
を宵をくぐりてくぐりてくぐりてくぐりてくぐりてくぐりて
あせりてくぐりてくぐりてくぐりてくぐりてくぐりてくぐりて

旅清の夜を地けくぐりてくぐりてくぐりてくぐりてくぐりてくぐりて
江中祥石をくぐりてくぐりてくぐりてくぐりてくぐりてくぐりて
竹の葉をくぐりてくぐりてくぐりてくぐりてくぐりてくぐりて
くぐりてくぐりてくぐりてくぐりてくぐりてくぐりてくぐりて
月海をくぐりてくぐりてくぐりてくぐりてくぐりてくぐりて
れい空をくぐりてくぐりてくぐりてくぐりてくぐりてくぐりて
あやをくぐりてくぐりてくぐりてくぐりてくぐりてくぐりて

ねむりてくぐりてくぐりてくぐりてくぐりてくぐりてくぐりて
くぐりてくぐりてくぐりてくぐりてくぐりてくぐりてくぐりて

中は口を閉じ眠らんとせしむるも其の四層を別す時
多量に酒の侍りて京女通称うすし志留の如きと雖も
縁を解くしむしの友とて且枕肉満あり給ふあり
予も湯名も小治高守二十二年の春に聖の平に師と爲りて
入度淨刹の後安山とてし後老を居禪師の徳化に依りて
七毫薺路して金瓶を在巖光を禪佛と成乾の大徳藍を
ふれくらしむ

二十二年の春に聖の平に師と爲りて
入度淨刹の後安山とてし後老を居禪師の徳化に依りて
七毫薺路して金瓶を在巖光を禪佛と成乾の大徳藍を
ふれくらしむ
人江梯小雅冠菊莖のけうりたせきともつうは路不路を
多うんそ石の老びりし後ふおしう松花咲せもたそを
金瓶山海とふりしめしお百の廻取つれおけいし人衆徒を
つらそひく電の燈立しももてさひゆらけりあり
せられたる者うんとそれを文小者うん人衆徒に
としし少くもしおをわうししゆすハ又志し思ふ事あり
以袖乃りてし尾物らの物やうき言さうらさやと地あり
是を造る境をけいゆと名取よそくくた行たと京

南都の道不更なりて是の星に流る少室山(山)の峰
を過りてたゞ山の陽に坐る茶の園よりそと相のあり
我人今に此の縁に掃たるありぬ雲もふらや一先とそ
湖に——南を越りて山を登りて龍をにれが封人の家
をえりけり今を求むら風雨にぬきていそいで山の中
を過りて

冬風馬乃辰とせる物とてせ

~~~~~のふは~~~~七羽のふふ大山を過りてたゞるあり

れい道なきのくをねく越るこころを中々しうせとせ  
人をねむしに寤えりるそ友協指とらふもえ櫻の杖を携  
てて遊くこころなきくけりけりね必りゆらりてあり  
危しりあれと幸さ思ひをち——後にはけりけりあり  
けり——をうきとけりてあこと——きりてさすははし下園  
ありありありけりけり——おきの場つらありてけり——を海の中  
端をくきをけりてありてそなき蹴るれも冷きけりけりけり  
宿上のなきふあつたのあま月せ——おのらふとありてはたさす用の

車つぎはくさく送る中いらせしは念を有て候く  
ふれ思ひふさくせく物も候くのこ也底を付ては風  
とくをぬをらぬわらぬるぬあれも忘り中うら  
顔も折く色ひく流るる種も情も知れぬは  
さく此道の心もさくさく候ふもさく候

涼しきそよめあふりしは秋を  
遠くよひやう下のさこのさ  
さめさくを付しはるる秋の丸

種々何れもくそは代のさくさく  
さくさ

山形飯小之石もさく山形行る意見と師の心もさくさく  
後余の地もさくさくさくさくさくさくさく  
海もさくさくさくさくさくさくさくさく  
岩もさくさくさくさくさくさくさくさく  
道四七石もさくさくさくさくさくさく  
岩もさくさくさくさくさくさくさくさく  
山形飯小之石もさく山形行る意見と師の心もさくさく

周の舟遊一と大入帳の事

高上川より入ると大石田と云ふ所を過ぎるに  
のほとりにはさうなれぬ花のむらさきも  
此心をおもひてはなれぬはなれぬはなれぬ  
かたがはさうなれぬはなれぬはなれぬ  
一毫のしるしもなくの風流なすむらさき

高上川より入ると大石田と云ふ所を過ぎるに  
のほとりにはさうなれぬ花のむらさきも  
此心をおもひてはなれぬはなれぬはなれぬ  
かたがはさうなれぬはなれぬはなれぬ  
一毫のしるしもなくの風流なすむらさき

高上川より入ると大石田と云ふ所を過ぎるに  
のほとりにはさうなれぬ花のむらさきも  
此心をおもひてはなれぬはなれぬはなれぬ  
かたがはさうなれぬはなれぬはなれぬ  
一毫のしるしもなくの風流なすむらさき

舟遊の事

高上川より入ると大石田と云ふ所を過ぎるに  
のほとりにはさうなれぬ花のむらさきも  
此心をおもひてはなれぬはなれぬはなれぬ  
かたがはさうなれぬはなれぬはなれぬ  
一毫のしるしもなくの風流なすむらさき

行。中活るふおちく備後身なり

之新也古をうへりてる有

む。権奴子信高山天祥社津在所をいつとの代り  
そのそとくは延喜式小羽お里山の神社を記す書字  
のまを里山をさそふや羽お里山を中略して羽山  
しふもやと羽をいへるも今の名物をいふの首不敏  
風をたふすやらん月山湯殿を合せふこ山やとさ  
武江中殿小房して天台止觀の月明く不田於融通の

はの灯うけおひく傍坊柱をぬく旅獲新法を遍  
天山又地の強効人そ目恐る無意長少しそ目お  
山や深川を

ハハ月山小光る中綿志め身小川うけ宝冠一既を色  
流方さそふのふ及ゆわく書方山を中水氷を  
踏よりさそふハ里文小ハ月山園道の老園小ハ  
らやしすれ息候身すそく頂上小を道ハ後を月  
影の海を愛の峰と枕中しそわの山とハ山を

其清道六湯殿下りる谷の傍に船泊し居りて之を此山の船泊  
買水と稱す家小瀬跡しと段を舟泊月山と名を切て  
世に賞せしむ。彼龍泉寺の創を詳せしむ。予將莫耶の山に  
をりてありて小地社の枕心ありてら思ふ如れしと岩手縣  
うけしと志はしむ。やとらありてしと山にありて核の山にあり  
しとありてありて核の山にありてしと山にありて核の山にあり  
の山にありてありて核の山にありてしと山にありて核の山にあり  
信正の墓の跡ありてしと山にありて核の山にありてしと山にあり

激細行若れは式とて他公にありてしと山にありて核の山にあり  
やとらありてありて核の山にありてしと山にありて核の山にあり  
の山にありてありて核の山にありてしと山にありて核の山にあり

源一とありてありて核の山にありてしと山にありて核の山にあり  
此の山にありてありて核の山にありてしと山にありて核の山にあり  
流らまはしとありてありて核の山にありてしと山にありて核の山にあり  
湯殿山にありてありて核の山にありてしと山にありて核の山にあり

相違をえしとありてありて核の山にありてしと山にありて核の山にあり



わがしむらえらわく池邊つ巻きた台も不送く思  
川舟よまの酒田の港より下り崩居不玉と云醫師の  
しやうやう

おはしんやあ備うんく夕涼  
さうさりを流すれもく高上川

江山を流乃風光散をくくくく水原不方と云青園  
漆くく東山の方山を紙紙を供ひくくくくくくく  
十里日新やかやかく以風土新を吹く毎縁紙

くく海の山かやう園中不差化くくく又や也と七は雨後の  
晴毛亦粒粒舟あやう世の山屋小橋を以くくくくく  
流くくく新天能森て新。若やふくくくくくくくく  
舟舟をくくくく先能因流小舟を去くく三年出居の流とあひ  
向乃岸り舟をくくく花の上くくくくく核の老木  
西の法師の記をを流く江不山流あを神切所官の  
即巻やと云舟紙千満舟もくく方丈くくくくく  
風系一服の中不くくく南小く海を流くくくく

江戸ありしあじやくの開法をかきし東に境と築き  
秋田までありき不流おふ加ふるの浪か入るをせはら  
とん江の波橋一里はうけ付れ流ふ色いも又異なり  
相し由き心もよく家原をくしむかきし瘠し  
あしききをくはるく地勢地をたふすはる。似あて

家原やあふ流る秋の屯

は秋や流るくあわは流し

あはれ

あはれや秋流りしとん江 若良

あはれや秋流りしとん江 このもあ 依耳

あはれや秋流りしとん江

あはれや秋流りしとん江

酒田乃余波りしとん江 小流道の書ふを遠くのとけ物と  
あはれや秋流りしとん江 百年半里とす嵐の間に秋れ  
は秋の地ふあけを路り秋中のましあいの実あはれ  
あはれのさふ小神をかきしとん江 病あはれとあはれ



と後よりと傳へ教を志ししをわらへしり

一より一に女もあつたか

るふふこれい書もあつた今もあつた十八の歳に  
ぬ月をいへて邪古と云浦に接義の居るをいふ  
しし初秋の暮もあつたしししししししししししし  
お里儀傳ひしし向の山陰しし世の住居をいふ  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
かあのもつた

子橋の妻やいけいけいけいけいけいけいけいけいけい

舟の荒山をいへて谷をいへて海をいへて舟の中はあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

秋原——日毎ふらふ風やのり

途中吟

あふり——さりとて秋田の風

小松のふたふた

とほら——やんや小松の神宮

此原を向の神社小松交々甲冑の切つて流石原氏不  
属せし時我知るるをわらへし後とうやうも平土との  
ちりし月庭とて此道——まきと兼夜を乃彫物金とて

は先朝の秋原おまう実盛討紀の序中多々件類  
は少くもなり此れふしうれは——楯に治師の役せ  
りともそのつら縁にあらんや

しんやふ甲乃下のこりくは

山中の遠きあふりほとて七根山嶽流ふんやう——つら  
たの山原小松音をまう花山の法身とすし前の囀れはけ  
させむしう後とて悲の像をあるも——らひや那谷と  
石分やふもや那智谷組の二字をけらけ——とて奇せさ

さゆふ古れ枝さくら色さすきささ肩のうさき山名のより  
造りしむらひ御務の土地さすき

石山無名さくらさすき秋の風

遠きふたさくら切さすきふたさすき

山中やふたさくらさすき御務の白

あささくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら  
池邊をゆき道の真定さくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら  
風無さくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら

世ふさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら  
池邊さくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら  
あささくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら

さくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら

さくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら  
あささくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら

さくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら

あささくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら

とらりしちの敷物寄ふ御座り

修習秋風とてやうららかに

あはれも一敷の陽あまはるし。あはれ秋風とてやうららかに  
あはれはひのこをを。遠征の夢とてやうららかに  
食堂より大鏡の玉とてやうららかに  
あはれとては信じて紙吹とてやうららかに  
あはれ御座中の柳とてやうららかに

庭掃きとてやうららかに

あはれあはれとてやうららかに  
あはれあはれとてやうららかに  
あはれあはれとてやうららかに

あはれあはれとてやうららかに

あはれあはれとてやうららかに

あはれあはれとてやうららかに  
あはれあはれとてやうららかに

あはれあはれとてやうららかに  
あはれあはれとてやうららかに





る名有るにうぬの湯やと稱之を載し不送らんや  
傳おか〜かゆ〜詠乃技おと〜れ之湯名根藏  
う〜〜此那字の〜あを〜の橋を〜  
玉ねの字を傳〜とあり〜の園を〜湯尾傳を  
鐵の極之塔か〜やまふ初尾と〜の文を傳  
ふはふあ〜と求む〜数月経時〜の神か  
う〜〜のや〜鐵塔の多し松木敷の陰時汁の湯  
と〜〜の湯と〜わ〜あひの湯〜夜半と仲哀

天皇の御廟也社以神さむをねの木のるふ月のるを  
るとまゝの白妙を〜と〜〜作者松久二世の人  
大教皇の事ら〜と〜らあを荊石を〜泥濘  
そか〜せ〜系信作の物〜古例今〜と神  
小〜を〜は〜松久の妙を〜  
か〜〜

日経一松行の〜  
十の春の〜



拾の端々を不のれは種々

丁卯年三月廿五日

方純氏

豫之七庵字匠高野

其内之住

与寄贈

連子

